滋賀文化財だより
NO. 147
1990.3.20
●編集発行／財団法人滋賀県文化財保護協会

173. 平成元年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その1

平成2年3月3日、恒例の県下発掘調査スライド大会が滋賀県埋蔵文化財センターで実施されました。

県下では、本年度も数多くの発掘調査が実施され、貴重な成果を上げています。ここにその成果の一端ではありますが、20件余りの調査発表を紹介いたします。

今後の参考として御活用いただければ幸いです。尚、御多忙の中、御協力いただきました方々に厚くお礼申し上げます。

1. 古墳時代前期の集落跡を新たに発見

大津市仰木町　下仰木天神山遺跡

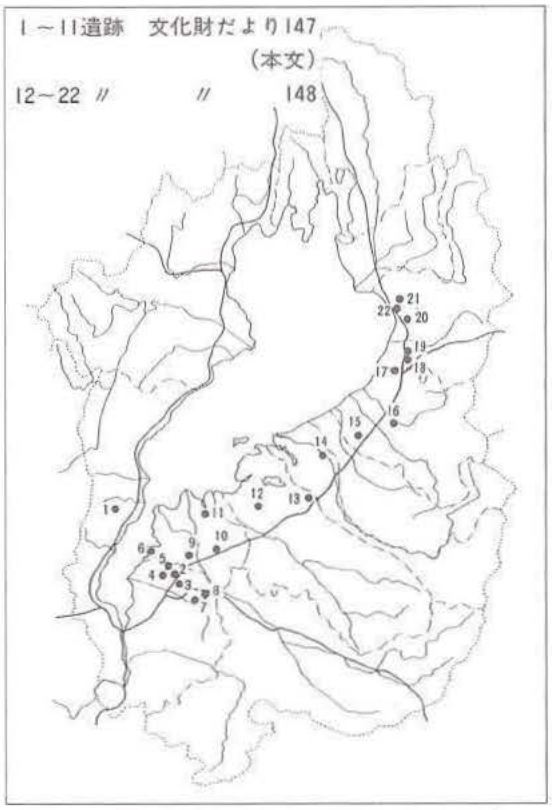
本遺跡は、比良山系から湖岸に向かって伸びる滋賀丘陵の末端近く、比叡山中に源を発し、琵琶湖へと注ぐ天神川の右岸に位置しており、遺跡のすぐ北東には、大津市内でも屈指の古墳時代後期の大群集墳である春日山古墳群が接している。

この遺跡は、当初、古墳～奈良時代の窯跡群として確認されていた。

しかしながら、この遺跡については、1～2回の発掘調査が行われたに過ぎず、その実態については、充分に掌握されていなかった。

調査は、団体営の圃場整備に伴って実施したものであり、調査の対象面積は、約 2,800㎡であった。

検出した竪穴住居



遺跡位置図(位置図の番号は本文と同じです)

調査は、対象地の田全てに最低1本のトレンチを設定し、重機により試掘し、その結果3ケ所で遺構が確認されたのでその地点を中心に実施した。

その結果、竪穴住居9基を中心に溝跡、土壙、ピット等を検出した。

そのうち竪穴住居については、平面プランが大型のものは一辺6～7m、小型のものは一辺4mの隅丸のほぼ方形を呈しており、深さは、残りの良いもので約20cmであった。

全体がうかがいえたものについては、その中央に炉跡を備え、四柱穴を有していた。

竪穴住居9基のうち4基については、建て替えが行われており、一回り大きな規模の建物への変化が認められた。

また、壁溝の検出されたものも2～3基認められた。

さらに、火災に遭遇し、焼け落ちたと見られるもの

もあった。

これらは、出土遺物から、古墳時代前期のものと考えられ、下仰木天神山遺跡に集落跡の存在したことを明らかにした。

（大津市教育委員会　須崎　雪博）

2．滑石製品の生産された集落跡

草津市西矢倉　谷遺跡

谷遺跡は、草津市西矢倉一丁目～二丁目に所在する弥生時代から平安時代の集落跡で、草津川改修事業に伴い、平成元年6月より発掘調査を実施した。この結果、調査区の東側から中央部に広がる瀬田丘陵の先端部と考えられる部分では、竪穴住居群と無数の柱跡等が検出された。また、これより西側に広がる低湿地の部分では、多くの土壙群ならびに溝跡が認められた。

西側低湿地より検出された土壙群は、弥生時代中期の土器を出土するもので、東側丘陵部でも検出されたが、数は極めて少なかった。

一方、東側丘陵部で検出された遺構は、大きく二時期に分けられる。一時期は、古墳時代後期で、8棟の竪穴住居跡と、一辺10.5mの古墳（方墳）の痕跡等が認められた。これらの住居跡等からは、小型模造鏡、紡錘車、有孔円盤等の滑石製品ならびに滑石原石が多量に出土し、東側に隣接する中畑遺跡と同様、滑石製品の生産が行われていたことがうかがえる。両遺跡はともに、古墳時代における滑石製品生産の拠点となっていたと考えることができる。

また、もう一時期は、平安時代中期を中心とする時期で、現在確認されているだけで9棟の掘立柱建物跡が存在するが、これ以外にも無数の柱跡が検出されていることから、掘立柱建物はかなり多数存在したものと考えられる。しかしながら、これだけ何度も建て替えが行われ営まれていた掘立柱建物集落も、平安時代後期には消滅するのである。

（草津市教育委員会　藤居　朗）

竪穴住居群および方墳

3．奈良時代の官営鋳造工房か？

草津市東矢倉　矢倉口遺跡

矢倉口遺跡は草津市東矢倉3丁目周辺に所在する古墳時代から中世にかけての集落跡である。

今回の調査は遺跡内で店舗建設が予定されたため、その事前に調査を実施、調査面積は約 3,000㎡である。

調査の結果、奈良時代から平安時代の掘立柱建物跡26棟のほか、井戸跡2基、溝跡7条、溝状遺構3基、土壙7基のほか多数の遺構が検出された。

26棟の建物跡は大きく4群に分けられ、従来の調査結果同様、建物方位を真北にとっており、柱筋を揃えるなど規格性が顕著である。特に、本調査区の初現的建物群であるA群では、家屋群をL字形に配置し、倉庫群についても計画的に配置して、家屋群と倉庫群の位置を明確に区分しているようである。

今回の調査で最も注目されるのは、井戸跡ＳＥ１から出土した鋳造関連遺物で、器状の鋳型、溶解炉炉壁とりべ等が奈良時代の土器と共伴して出土している。

製品の器形は判明していないが、少なくとも4種類の鋳型の形態が認められ、有段の器状のもの、鉢状のもの、圏線を持つものがあり、断面形状に切り抜いた板を回転させて作る「引型法」により製作されたものであろう。また、炉壁片は、円形を呈するもので、送風孔と考えられる施設を持つものがあり、形態的には向日市の長岡宮跡第128次調査で出土している製(精)鉄炉に類似するものと思われるが、鋳型等との共伴から鋳造関係の炉と思われる。

矢倉口遺跡は従来より建物群の配置状況等から特殊性が指摘されていたが、鋳造関係遺物の出土により遺跡の特殊性がより顕著になったが、製品の形態、その供給先等の問題が残されており、今後の調査研究に委ねたい。

（草津市教育委員会　谷口　智樹）

第23次調査Ａ地区遠景

4．大規模な地震跡発見

草津市御倉町　襖遺跡

5cmのレキを含む噴砂

襖遺跡は草津市の西南部御倉町に所在する。この遺跡は新草津川改修工事に伴う試掘調査で発見され、弥生～平安時代の複合遺跡である事が判明した。

県教育委員会と県文化財保護協会は昭和63年度より本調査を実施し、本年度も約11,000m²の調査を行った。以下その成果について少し述べることにする。

今回は６つに調査地を分け、それぞれで次のような遺構を検出した。

第１トレンチ：２×２間の掘立柱建物（総柱）、土壙、ピット。

第２トレンチ：土壙、ピット、噴砂。

第３トレンチ：土壙、ピット、噴砂。

第４トレンチ：掘立柱建物、溝、柵列、ピット、土壙、土取り穴、噴砂。

各トレンチは、全て後世の土取り等かなりの撹乱をうけていたので、遺構の残存状態は極めて悪く、特に第５、６トレンチでは、遺物のみで遺構は確認できなかった。

当遺跡で検出した噴砂について説明する。

通常噴砂は中粒砂以下の砂層が液状化し地上へ噴き出すとされており、レキ層は液状化しにくいと言われているが、当遺跡の噴砂は最大５cmのレキを含むレキ層が液状化し、地上に噴き上げていた。又、方向は断層に平行するようだが、第３トレンチでは縦横無尽に走っていて、方向性はつかめない。規模は最大幅25cm、最大長約15ｍのものもあり地震の大きさが想像を絶する規模であった事がわかった。この噴砂の発見によって、自然の力が人間の考えをはるかに超えるものであることが再認識された。

（㈳滋賀県文化財保護協会　池崎　智詞）

5．奈良時代の掘立柱建物群

草津市南山田町　墓ノ町遺跡

墓ノ町遺跡は草津市南山田町地先に所在し、昭和60年度に県道拡幅工事に伴い発見されたものである。周囲には、古墳時代の方形周溝墓・古墳を検出した襖遺跡などが所在する。

今回の調査は、民間開発に先立ち実施されたもので1,500m²余について発掘調査を実施した。調査の結果、本遺跡は古墳時代から平安時代にかけての集落遺跡であることが判明した。その中で注目すべきものに、奈良時代と思われる掘立柱建物群がある。当該建物群は、磁北に方位をもち、５×２間のＳＢ３および２×２間のＳＢ５と呼称する建物を中心に計８棟が一群を形成している。またＳＤ９・10は、当該建物群と並行して検出されており、建物群を区画する機能をもっていたものと考えられる。

当該建物群以降は、建物規模および軒数が急速に減じていく傾向を指摘でき、集落の構造を考えていく上で興味深い現象といえる。

この他、古墳時代のいくつかの遺構からは、土師器高杯の脚部のみが集中して出土しており、祭祀の一形態とも考えられるが同様の遺構は、当該遺跡東方に位置する中畑遺跡でも検出されており、両者の関係が注目される。

（草津市教育委員会　小宮　猛幸）

全　　景

6．弥生前期土壙群と中期方形周溝墓群

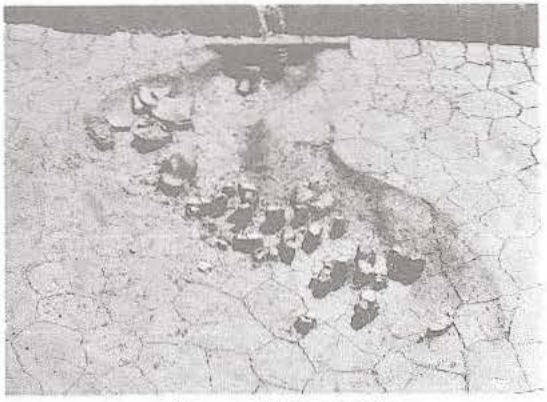
草津市下物町　烏丸崎遺跡

烏丸崎遺跡は、烏丸半島と通称される琵琶湖に鉤状に突出した半島上に立地している。過去の調査では、弥生時代前期の竪穴住居跡や、弥生時代中期の玉造工房跡、半島全域に及ぶと思われる方形周溝墓群などが検出されている。

今回の調査は、烏丸半島のほぼ中央部であり、検出遺構は大きく上層と下層に分かれる。

上層で検出された遺構は、弥生時代中期の方形周溝墓群で、10基以上確認されている。方形周溝墓は、周溝が四隅を完周するものがほとんどで、そのうちで最大規模の6号周溝墓（10×11m以上）からは、木棺が検出されている。木棺は、小口板が失なわれているものの、遺存状況は良好であり、天井板が落ち込んだ状況で検出された。底板のほぞ穴に小口板を差し込み、小口板を支えとして、側板を底板の上に置く構造だったと思われる。当遺跡の周溝墓には供献土器が少なく、個々の細かな築造時期を知るのは難しいが、およそ中期中葉頃と推測される。

下層より検出された遺構は、弥生時代前期にまで遡る土壙と溝で、土壙は大小合わせて20程度である。土壙は分布の傾向として、大きな土壙は単独で、小さな土壙はいくつか集まる特徴がある。そのうちＳＫ03は、巾2.5m、長さ３m以上の楕円形の土壙で、炭化物を含む暗灰色粘土を埋土とする。肩部に段、頸部に削り出し突帯を有する壺の完形品を出土している。またＳＫ22からは、２条の沈線を廻らす甕、頸部に段を有する壺など、弥生前期の土器と共に、２条の突帯を有する縄文時代晩期の深鉢が出土している。遺構内から弥生時代前期と縄文時代晩期が共伴する資料として貴重である。　　（㈶滋賀県文化財保護協会　横田　明）



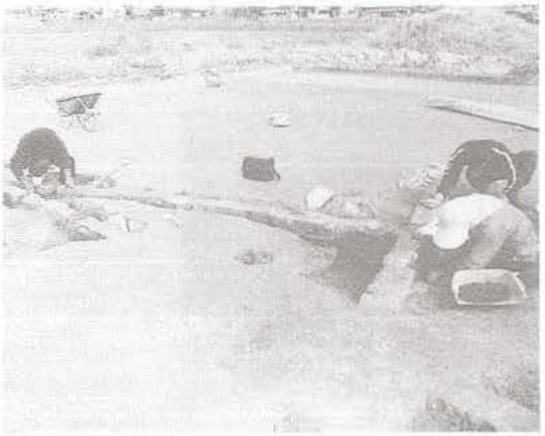
土壙ＳＫ03遺物出土状況

７．古代の鋳造関連遺構を発見

栗東町字御園・上砥山　中村遺跡

団体営ほ場整備事業に伴う事前調査で、昭和63年度から続く第２次調査である。

今回確認された遺構は、８世紀末から11世紀頃にかけての掘立柱建物、土壙、溝、耕作痕の他に注目すべきものとして、鋳物関連の遺構（溶解炉２基、燃料となる木炭を造っていたと思われる土壙、不用になった鋳型、炉壁、鉄滓等が多量に出土する廃棄土壙）が発



溶解炉の発掘作業状況

見された。溶解炉は、製鉄炉の可能性も残るが、鉄滓の出土量が少量ということもあって現段階では鋳造用の溶解炉として報告する。１号炉と呼んでいる溶解炉は、炉のまわりに大きな円形の土壙（大きさ約 320×270cm、深さ約30cm）を付属し、その中は粘土と不用になった炉壁を丁寧に敷き詰め、何回も焼いて防湿の役割を果たしていたことが考えられる。また、炉の形は、上部構造が削平を受けているため、はっきりと復原することはできないが、炉壁の破片や床の焼けている面が円形であったことから、円形もしくは楕円形を呈していたことが伺われ、製鉄炉ではあるが、漢代の中国河南省鞏県鉄生溝の円形煉炉に類似する点から、半地下式のシャフト炉のようなものであった可能性もある。さらに炉につながる長方形の部分（大きさ約60×100cm、深さ約50cm）は、炉の部分より約20cmほど低くなっていることから、通風炉であったと考えられ、炉の背後からは鞴を使って風の廻りをよくしていたことが考えられる。出土遺物としては、９世紀代の須恵器（杯・壺）等が出土している。

以上のような遺構が確認された中村遺跡は、墨書土器や越州窯系青磁が出土したことも含めて、一般集落とは考えられず、鋳型の中に仏具（台や容器に付属する獣脚）や鍋と思われるものが存在することから、平安時代に栗太郡の中心であった金勝寺（天長10年定額寺になる）との関連があったと思われる。

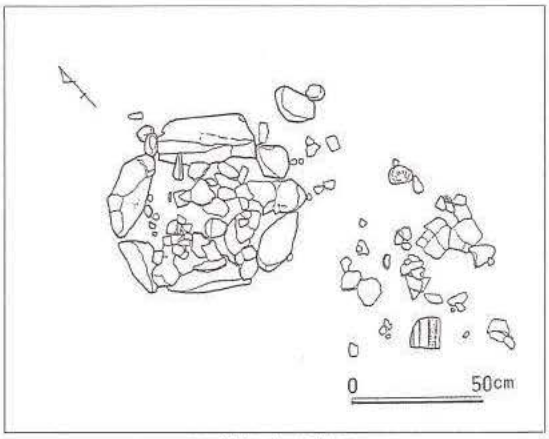
（㈶栗東町文化体育振興事業団　近藤　広）

８．縄文時代の竪穴住居

栗東町川辺・安養寺　狐塚遺跡

狐塚遺跡は、栗東町大字川辺・安養寺に所在する、縄文時代から中世にいたる複合遺跡である。遺跡は野洲川が形成する扇状地に位置している(標高 103～104m)。

今回の調査では、第一遺構面から平安時代末の掘立



石囲炉出土状況

柱建物一棟が明らかになっている。

さらに70cmほど下の第二遺構面では、縄文時代の竪穴住居２棟が切り合った状態で検出された。新しい方の住居は、直径約 4.2m で不整円形の竪穴住居であり、10個の柱穴が掘り込まれている。住居内には石囲炉が設けられていた。この炉は、外径75～67cmの楕円形で９個の石材が用いられている。うち、５個の石は接合が可能で、長さ58cmの砥石に復元できる。他の２個は敲打痕のある石が転用されていた。炉内からは、中津式でも古い段階の土器が出土している。この他、住居の埋土からは、縄文土器片、剥片が出土した。

切られている方の住居は、直径約 4.7m で不整円形の竪穴住居である。柱穴は約６個に復元できる。縄文土器・石鏃・剥片が出土している。新しい方の住居とは近接した時期であると考えられる。

今回明らかになった縄文時代の住居は、湖南の内陸部においてはもっとも古いもので、今後縄文時代の集落立地を考えていく上での重要なポイントとなろう。

（㈶栗東町文化体育振興事業団　雨森　智美）

９．掘り出された住居跡

野洲町野洲　野洲川左岸遺跡

調査地は野洲川より約 500m ほど離れた場所で周辺は発掘調査によって古墳時代前期の集落や流路等が発見され、今回の調査でも南北方向の溝群が検出されると予測された。

調査の結果、遺構面は水田面より約50～30cm下で黄灰褐色系の砂質土がベースとなっていた。遺構は大きく２時期に大別される。Ⅰ期は、幅約１m前後、深さ50cm前後の溝が13検出され、南から北へと流れている。溝からの出土遺物は須恵器、土師器片が主で時期を確定できる遺物は出土しなかったが鉄器片が１つ出土している。

Ⅱ期は、不整形な落ち込みと大型方形竪穴住居（7.8

ＳＢ－01　検出状況

m× 8.1m）と小型竪穴住居跡（5.9m× 5.5m）が検出された。出土遺物は、弥生時代終末から古墳時代前期初頭の甕、器台、高坏、壺が出土した。また調査区北東隅から方形竪穴住居跡が検出され４世紀末頃の壺が出土した。

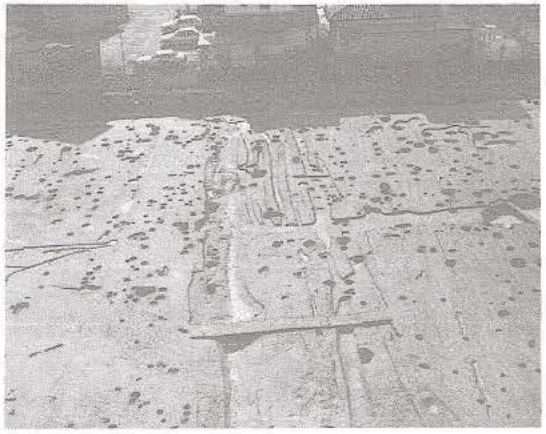
今回の調査で野洲川左岸遺跡内の弥生時代終末から古墳時代前期初頭の集落の在り方について10基程度の竪穴住居でグループを作るものと、グループ間に小数の竪穴住居によって構成する小グループの２形態があるのではないかと推定され、最近試掘調査等で確認された方形集溝墓群との位置関係から集落の単位や景観復元が近い時期に具体的にできると考えられる。

（野洲町教育委員会　杉本　源造）

10．野洲郡衙に伴う道路

野洲町小篠原　小篠原遺跡

野洲郡衙推定地は、野洲町役場の所在する一帯に真北地割があり、東山道に近接する小篠原遺跡が有力な候補地である。今回の調査は、推定地北西部にあたり共同住宅建設に伴って、 4,500m²ほど発掘調査を実施した。その結果、奈良～平安時代の掘立柱建物61棟、道路跡１条、溝３条、土壙20ヶ所を検出した。建物は、奈良時代の掘立柱建物10棟と平安時代の建物51棟を検出した。特に奈良時代の遺構が重要であるため、この時代を中心に報告する。建物は、１辺40～60cmの方形又は円形の柱穴で、総柱構造と通常の側柱構造の２タイプが見とめられる。これらの建物は、真北地割に一致した幅４～５m平坦な路面を有する道路跡によって区分される。道路は、２条の側溝を40mにわたって確認し、溝内の遺物より奈良時代と決定される。この道路は、四町四方の地割にあたり、昭和62年度の役場裏の調査によって東西道路がやはり確認されており、地割が存在することが明らかとなった。調査成果をもとに区画を復元するならば、方四町の内側に格子目状に道路が造営され小都市景観が形成される。この中に郡



南　北　道　路

第５遺構面全景（南より）

衙に伴う建物群・官人建物群が配置されているようである。特に、北東隅の青葉台地区では、郡庁に類似した建物の配置が検出され、出土遺物より２次郡庁又は郡司クラスの居宅と考えられる。中央部の堂の後地区では、総柱の４棟の建物群の検出もあり、郡衙中心部に関連する遺構とされる。一方、県内における奈良時代～平安時代前半の道路の発見例は、管見する限りでは今津町日置前遺跡の中央道路（北陸道）、野路岡田遺跡中央部の無遺構地帯（東山道）などがその候補に上っている。いずれにせよ野洲郡衙推定地の調査着手から15年、あと10年内に全体の構造が明らかになろう。

（野洲町教育委員会　花田　勝広）

11．白鳳時代の木簡９点出土

中主町西河原　西河原森ノ内遺跡

西河原森ノ内遺跡第５次調査は、昭和59、60年度の第１、２次調査によってその存在が明らかとなった白鳳時代～平安時代前期の官衙状遺構群の南東部 918㎡を対象として調査を行なった。

遺跡の立地は、航空写真や地理学的な方法によると、その北西側と東側に旧河道や埋没旧河道がみられ、これらに挟まるような形で南から北へ延びる埋没微高地の北端上に位置するものと思われる。特に遺跡北西側に接して流れる埋没旧河道は、かつては内湖化していたと考えられる後背湿地に流れこんでいくもので本遺跡が旧河道と旧内湖を通して琵琶湖との密接な関係を有していたことが考えられる。

調査を行なった７世紀後半～16世紀までの遺構の内で８世紀前半以前の主要な遺構の状況は、両側に土塁状の畦をもつ南北方向（Ｎ―15―Ｅ）の水路を境に、東側に水田跡、西側に官衙状遺構群（掘立柱式建物群）を検出した。

調査地南側を中心とした官衙状遺構群の上面には、約 400㎡にわたって平均30㎝、厚い所では１ｍ余りもの籾殻の堆積層がみられた。この籾殻は、稲を脱穀した後廃棄されたもので、８世紀前半以前の遺構面は、この籾殻層の上面に営まれた遺構群である。建物群は、全て掘立柱式建物で建替も含め７棟余りが確認され、その多くが建物の回りに雨落溝をもつものであった。

出土した遺物には、籾殻層内を中心に多くの土器（墨書土器含む）・木器（鞍・壺鐙・櫂・稲櫛・琴柱・鋤・鍬・斎串・下駄）等があるが、このうち木簡は、前回の調査により出土した４点と今回の９点を含め13点が出土したことになる。

今回の調査は、官衙状遺構群の東辺に当る一部分であってその全てを知り得たものではなく、木簡などの大量の遺物の分析を含めた遺跡の性格についても今だ十分に検討を経ていない。しかし、これら木簡からうかがえる中央（国宰等）との関係が密接な初期律令期の公的な施設が、敢えて水辺の低湿な水田地帯に設けられたのは、この時期の周辺地にあった内湖や河道、更には琵琶湖を利用した水上（湖上）交通のことを抜きに考えることはできない。おそらく官衙域の隣接地に舟溜的な施設（桟橋的なものか）が存在するものと考えられ、識字層の人間が常にいて作業を指示し、この施設に何らかの稲が運び込まれ脱穀の後、都等に馬や舟を用いて再び搬出する等の作業をしていたものと想像される。

今後、木簡の解読作業や遺物の整理が進む中で明らかにされることも多いと思われるが、都以外の地で、これほど多くの白鳳期の木簡が出土したことはなく、厚い籾殻層の存在や官衙状施設内の諸遺構や諸遺物の存在は、その当時の生活を彷彿とするものであり貴重な成果といえる。

（中主町教育委員会　辻　広志）